

## 6 インドネシアにおける日本研究の 現状と将来

イ・ケトット・スラジャヤ (インドネシア大学)

### (1) 序論

1980年代初頭から、多くの国で、日本に関するあらゆることが人々の関心を集め、注目を浴びるようになった。これは、「日本ブーム」という言葉で広く知られている。この「日本ブーム」によって、インドネシアでは、インスタント・ラーメンのような安価な食品の製造から、高性能の生産手段に至る様々な分野まで、多くの人々が日本の影響に興味を持つという現象がおきている。

「日本ブーム」現象は、日本の科学や芸術の研究といったアカデミックな分野でもめざましい。例えば、日本の言語・政治・経済・文学・文化・経営・生け花・結婚式・料理といったことがらに、多くの人々の関心が集まっているのである。マスメディアの世界をみると、電波や活字メディアも、日本の紹介やニュースをたくさん報道している。ジャカルタにある58の日本食レストランは、在留邦人と同じくらいの数の中流のインドネシア人で賑わっているということを見ても、今日どれほど「日本ブーム」が広がっているかがわかるだろう。

現在では日本語を理解し話せるインドネシア人は、約3万5000人くらいいると思われる。日本語は、約130の高等学校で第二外国語として教えられているし、9つの高等教育機関、7つの日本語専門学校、4つの研究所で、日本研究が行われている。

この「日本ブーム」は、第二次世界大戦後の日本とインドネシアの関係の改善と平行して、1950年代から日本語と日本文化に徐々に関心が集まりだしたことに端を発しているのである。

### (2) インドネシアにおける日本研究の起源

#### ア 60年代の日本語・日本文化研究

日本とインドネシアの関係が改善されたことにより、日本経済の急速な発展ともあいまって、多数のインドネシア人が日本に強い関心をもつようになった。

1958年、Melati-Sakura 財団によって、〈日本文化学院〉がジャカルタに創設された。この財団は、インドネシアと日本の関係を促進したいと願う人々によって設立されたものである。日本文化学院で教えられた主な学科は、日本語と日本文化入門であった。日本大使館がこの財団を後援していた。

この時期、4つの国立大学に日本語・日本文化学科が創設されたことによって、日本語・

日本文化研究の研究体制が改善されたのである。4つの国立大学とは、IKIP Manado、バンドンのパジャジャラン大学、IKIP Bandung、ジャカルタのインドネシア大学で、後の3校は、インドネシアに43校ある高等教育機関のうち最も重要な10校に名を連ねている。時をおなじくして、財団や個人によって、中学校レベルの日本語学校もいくつか創設された。

1959年、H. Iwa Kusuma Sumantri 教授の主導で、バンドンに Akademi Pendidikan Ahli Bahasa Asing (APABA) が創設された。APABAには、英語・ロシア語・中国語・日本語の4つのコースがあり、パジャジャラン大学に付属している。IKIP Manado の日本語学科 (Japanese Language Department) は、日本語を教えている国立の高等教育機関のなかでもっとも古いとあっていいだろう。この学科は、「第二外国語は、アジアの言語を必修とする」という高等学校のカリキュラムの改編にもなって創設された。日本語は、高等学校で学習する外国語に選ばれたのである。

1963年、パジャジャラン大学文学部に、日本語・日本文学科 (Department for Japanese Literature and Language) が創設された。APABA の学生は、この新しい学科に編入された。1965年 IKIP Bandung に、日本語学科が創設された。これは、今日では、Program Pendidikan Bahasa Jepang と呼ばれている。創設者のほとんどは、パジャジャラン大学の教師であった。1967年、Fakultas Sastra Universitas Indonesia で、はじめて日本研究が開始された。ジャカルタの日本大使館を通じて日本政府がイニシチアブをとり、準備に半年かけられた。

1960年代に創設された日本語学校は、他に、バンドンの Akademi Bahasa Asing (ABA)、Yapari (1963年)、ジャカルタの Akademi Bahasa Asing (1964年)、ジャカルタの Akademi Bahasa dan Kebudayaan Jepang (ABKJ 1965年) である。60年代はインドネシアで日本語と日本文化が教えられるようになってから日が浅く、みるべき論文は書かれていないが、学生たちの努力は認めてもいいかもしれない。この時期に学んだ先駆者たちが、しかるべき学校で重要な地位につき、インドネシアにおける日本研究を発展させるために学問的な業績をあげることを望みたい。

#### イ 70年代と80年代の日本研究

1970年代から1980年代にかけても、日本語教育機関は次々と創設された。1978年には、インドネシア大学文学部に日本語学士のディプロマが与えられる日本語学科 (Japanese Language Diploma Program) ができた。この学位をとるためには、3年間の在籍が必要であり、主だった教師は日本文学研究学科 (Japanese Literature Studies Program) の講師である。学科開設時には定員30人であったが、1983年からは2クラス編成になり、毎年60人の学生が入学している。

メダンのスマトラ・ウタラ大学文学部にも、日本語ディプロマ学科 (Japanese Language Diploma Program) が創設された。1981年には、IKIP Surabaya に、日本語教育学科 (Japanese Language Education Program) が創設された。1984年には、前筑波大学客員教授の Dr. Arifin Bay を所長にして、Universitas Nasional に日本センター (Japanese Center) と日本語学科が発足した。

1986年7月6日、PERSADA（日本元留学協会）の会員たちによって、Darma Persada University (UNSADA) が創設された。この大学は、PERSADA の会長を総裁とする PERSADA 付属の財団 Yayasan Melati Sakura によって運営されている。この大学は3つの学部からなり、文学部には日本研究科 (Japanese Studies Program) がある。

これらの他に、バンドンに、Lembaga Bahasa dan Kebudayaan Jepang (日本語・日本文化センター)、メダンに Akademi Bahasa Asing Perguruan Tinggi Swadaya と Yayasan Hino Indonesia、ジャカルタに Akademi Bahasa dan Kebudayaan Jepang、エバグリーン日本語コース、日本文化センターの各コース、東京日本語学院、ジョグジャカルタにジョグジャカルタ日本文化学院ができた。

スラバヤには、日本領事館運営の日本語コースがある。Ujing Banjang の Universitas Hasanuddin では、副専攻科目で日本語が教えられている。カリマンタンの Universitas Mulawarman やボゴール農科大学でも、日本語が教えられている。ジャカルタの私立大学で、ホテルと観光事業を専門にしている Universitas Trisaki でも日本語が教えられている。1983年から、観光事業振興という実用的な目的で Sahid Hotel and Tourism Akademy でも日本語が教えられている。

インドネシアにおいて日本語への関心が高まるにつれ、1987年には、バンドンのパジャジャラン大学に、インドネシア大学文学部と同様の3年履修の日本語学科ができた。それと同時に、パジャジャラン大学には、日本語研究センターもつくられた。

1988年、ジョグジャカルタのガジャマダ大学に、日本語・日本文学学科と日本文化研究センターがつけられた。様々な分野でインドネシアと日本の関係が増大していったことに引張られるように、日本に関する教育・研究機関が急速に増えていったのである。

詳細は下記参照のこと。

I Ketut Surajaya “Japanese Studies in the Republic of Indonesia” in *Japanese Studies in Southeast Asia, Directory Series XI* (The Japan Foundation, Tokyo, 1987)

### (3) インドネシア大学日本学科における卒業論文のテーマ

インドネシアの大学の日本語学科には、まだ修士課程や博士課程がない（注：インドネシア大学には修士課程が1990年にできた）。従って、S1 (Sarjana) レベルの論文は、インドネシアにおける日本研究の到達度の指標には成り得ない。それにもかかわらず、論文のタイトルを見るかぎりでは、それらの研究は、修士あるいは博士課程レベルでさらに研究したいと願う学生にとって、独創的で将来の発展のもととなる研究と思われる。以下に学生たちが選んだ卒業論文のテーマをいくつかあげて、実例を示したい。

#### ア 日本語・言語学

インドネシア大学日本語学科は、1973年に、最初の卒業生を送り出した。それ以来今日(1989)まで卒業論文テーマに言語・言語学をとりあげた学生は、15人しかいない。以下に例をあげる。

「助詞『の』『て』」「動詞『する』」「『どれ』『どこ』『あちら』のインドネシア語への翻訳」

「れる・られる」「動詞『いく』と『くる』」「助詞『は』『が』」「日本語の受動態」「複数形」「『—ら』『—ば』『—なら』」「『—て\*いる』『—て\*いた』」「漢字の研究」

概してこれらの論文は、インドネシア語との比較研究である。学生たちは、言語学の基本理論を使っているが、テーマを深く掘り下げているとはいえない。

### イ 日本文学

日本文学研究は、作品研究も作家研究も行われてはいるが、紹介にとどまっており、文学論を展開するレベルには至っていない。以下に、例をあげる。

「島崎藤村『破戒』」「人形浄瑠璃」「夏目漱石『こころ』」「芥川龍之介『鼻』」「万葉集」「木下順二『夕鶴』」「伊藤左千夫『野菊の墓』」「夏目漱石『三四郎』」「有島武郎『生まれ出づる悩み』」「浮雲」「森鷗外『山椒太夫』」「武田麟太郎『雪の話』」「小説『千羽鶴』」「志賀直哉とその作品」

これらの研究は、作品のタイプや、作品と作家の関係、時代精神の流れのなかでの作家の思考の発展、現在とは異なる時代の社会や特定の階級の特徴を体現している登場人物などを紹介するにとどまっているが、おのずと研究者自らの見解も含んでいる。これらの研究は、S1 (Sarjana) レベルの論文なので、比較文学的な考察や文学批評的な考察をするには至っていない。

### ウ 日本史

歴史的なテーマは、もっとも多く多くの学生によって卒論に選ばれている。日本史、特に明治維新以降の日本の近代化に、学生たちが非常に興味をもっているからであろう。発展途上のインドネシアが直面する問題の背景を考察するとき、1960年代後半以来の日本の経済的成功を含めて、明治維新から第二次世界大戦終結にいたるまで、日本が民主主義を確立できなかったことは、非常に興味をそそる事柄である。したがって卒論のテーマは、以下の例のような傾向のものが多い。

「明治時代の自由民権運動」「明治時代の教育」「日露戦争」「聖徳太子」「キリスト教と鎖国」「明治時代の女性運動」「岩倉具視」「太平洋戦争」「1946年日本国憲法」「北方領土問題」「町人の歴史」「西郷隆盛」「自衛隊」「日清戦争」「西周」「出島」「財閥」「平安時代」「満洲事変」「殖産興業」「安保条約」「明六社」「日本の台湾侵略」「総合商社の歴史」「天皇裕仁」

これらの研究は、英語に翻訳された二次資料によるものがほとんどで、日本語の一次資料によるものは少ない。それにもかかわらず、インドネシアの日本史研究はアメリカ合衆国に遅れをとっているため、これらのテーマは、インドネシア人にとっては比較的新鮮なものである。これらのテーマがインドネシアに日本の歴史を紹介したことには、注目すべきである。

### エ 日本文化

文化的なテーマも、卒論にとりくむ学生たちに人気のあるテーマである。インドネシアと日本の関係は増加したが、それによって相互の文化的理解が深まったことにはならなかった。日本経済の不振によってインドネシアが被った影響の結果、1970年代にはインドネシアと日本の関係が悪化し、反日感情の昂まりは、1974年1月に頂点に達した。他の東南アジア

諸国でも同様の現象がおきた。この悲しい経験が、多くのインドネシア人に日本文化を真剣に学ぶ必要性を痛感させた。そして、学生たちが以下に挙げるような日本文化に関するテーマを選ぶ結果になったのである。

「日本文化の特徴」「祭りの意味」「沖縄の民話」「切腹の文化的背景」「仏教の世俗化」「祖先崇拝の概念」「日本人とユダヤ人」「武士道」「無常観」「神道」「実学」「不動」「日本の婚姻制度」

これらのテーマは、日本人の特徴と日本文化の価値を具体的に説明することに成功している。

#### オ 社会問題

社会問題について論じた論文は、今のところ非常に少ない。これは、社会問題が必修科目でなく選択科目になっているカリキュラムの影響だと思われる。それにもかかわらず、以下に挙げるテーマには興味深いものがある。

「第二次世界大戦後の農村における構造変化」「第二次世界大戦後の女性の役割」「第二次世界大戦後の老人問題」

日本の現代の社会問題は、明治時代や江戸時代の社会問題より興味をひかれるテーマである。今のところ、現代以外を扱った論文は、「江戸時代の士・農・工・商の身分制度に基礎を置く日本の社会構造」ただ1つである。

以上は、S1（学士）レベルの論文の特徴を手短に述べたものである。S2（修士）レベルや、S3（博士）レベルの研究は、まだ非常に少ない。現在、インドネシアにおいて日本研究の修士号を持つものは14人、博士号を持つものは3人である。Dr. Li Tek Tjeng は外交問題、Dr. Ketut Surajaya は歴史、Dr. Siti Dahsiar Anwar は文化についての研究を行っている。この数は、日本やアメリカ合衆国に留学している者が研究を終える5年後には、増えるであろう。

#### (4) 研究とその問題点

「日本ブーム」がインドネシア中に広まったにもかかわらず、科学的な日本研究は、それに歩調を合わせては発展しなかった。これにはいくつかの理由が考えられる。まず第1には、インドネシアにおける日本の専門家の不足である。インドネシアの高等教育機関には、全部で少なくとも70人の日本研究と日本語の教師がいるが、これらの教師たちは、主に日本語教育に携わっている。彼等は語学教育に忙しく、自身の個人研究あるいは共同研究を行うための十分な時間が取れない。

第2には、インドネシアの大学における研究費の不足である。そのために、研究費予算は、優先順位にしたがって分配される。日本研究は、優先順位が非常に低い。日本研究が行われる場合も、インドネシアと日本の共同出資で予算の得られる経済や工業技術に関係したものになりがちである。

第3に、日本語を習得していない研究者が実際に研究をすすめていく時にぶつかる問題である。一般的に研究は、英語の資料に基づいて行われるが、英語圏の文化的背景がそれらの

## 1988年度の日本語能力試験の受験者数

( ) 内は、1987年の推移

### ジャカルタ

レベル	申込者	受験者	欠席者
1	27 ( 24)	22 ( 23)	5 ( 1)
2	94 ( 48)	78 ( 43)	16 ( 5)
3	169 (131)	150 (110)	19 ( 21)
4	324 (257)	258 (217)	66 ( 40)
計	614 (460)	508 (393)	106 ( 67)

### スラバヤ

1	1 ( 0)	1 ( 0)	0 ( 0)
2	46 ( 12)	42 ( 9)	4 ( 3)
3	96 (107)	87 ( 97)	9 ( 10)
4	104 (129)	85 (122)	19 ( 7)
計	247 (248)	215 (228)	32 ( 20)

### メダン

1	2 ( 8)	2 ( 6)	0 ( 2)
2	11 ( 8)	11 ( 8)	0 ( 0)
3	59 ( 42)	52 ( 32)	7 ( 10)
4	116 (144)	105 (127)	11 ( 17)
計	188 (202)	170 (173)	18 ( 29)

### バンドン

1	6 ( 4)	5 ( 4)	1 ( 0)
2	25 ( 10)	23 ( 10)	2 ( 0)
3	143 (138)	117 (112)	26 ( 26)
4	440 (219)	364 (196)	76 ( 23)
計	614 (371)	509 (322)	105 ( 49)

### 全インドネシア

1	36 ( 36)	30 ( 33)	6 ( 3)
2	176 ( 78)	154 ( 70)	22 ( 8)
3	467 (418)	406 (351)	61 ( 67)
4	984 (749)	812 (662)	172 ( 87)
総計	1663(1281)	1402(1116)	261 (165)

The Japan Foundation, Jakarta の資料による

る。受験者は、1116人から1402人に増えている。申込者は、ジャカルタで614人 (460) [( ) 内は、1987年の数]、バンドンで614人 (371)、スラバヤで247人 (248)、メダンで188人 (202) である。

表のデータは日本語能力試験の申込者数と受験者数に関するものである。このデータは、正確でないにしても、インドネシアにおける日本語学習者の数を反映しているとみていだろう。インドネシア全土の語学教育機関で日本語を学習している学生の50%しかこの試験を受験しなかったとすると、1988年に推定される日本語学習者の数は、約3300人である。インドネシア大学日本語学科の300人の学生のうち、1988年には約50%にあたる155人がこの日本語能力試験を受験している。

資料自体に影響を及ぼしているおそれがある。このことは、特に経済学・政治学・社会学・国際関係学・人類学の専門家についていえる。

上記の第2の理由から、バンドンのパジャジャラン大学日本語研究センターや、Universitas Nasional・インドネシア大学、ガジャマダ大学の各日本研究センターは、日本のより一層の援助と協力を望んでいる。これについては、国際交流基金が研究費を含む研究者の交換のみならず、教師や研究者の養成、文献の寄贈などで重要な役割を果たしている。

インドネシアにおいては日本についての研究者が不足している一方で、多くのインドネシア人が日本に関することを学び理解したがっている。そこで、インドネシア語に翻訳された日本についての本が役立つことになる。すくなくとも、日本の経営・歴史・文化・社会問題といった分野では、有意義である。通例、これらの本は、英語の本からの翻訳である。日本に関する本の出版はまだ限られてはいるが、増えてきている。

## (5) インドネシアにおける 日本研究の将来

国際交流基金によって4年前から行われている日本語能力試験のデータをみるかぎり、受験者は、確実に増えている。1987年には1281人だった申込者が、1988年には1663人になっている。

現在インドネシアの教育機関には70人の日本語教師がいるが、それとは別に、最近日本語学科の卒業生のなかに高等教育機関の教員に興味を持つものが増えてきた。今後教員が増えたとすると、しかるべき時期にはインドネシアの日本研究所が増え、日本に関する研究も盛んになると考えられる。

現在インドネシアは就職難であるにもかかわらず、日本語学科の卒業生は、S0 (Diploma) レベルであろうと S1 (Sarjana) レベルであろうと、就職先に苦勞しない状況である。うまくいけば、競争が激化する風潮のインドネシア社会において、今後人々の関心はよりいっそう日本研究に集まるであろう。